

国際業務の 窓辺から

CLAIR 経験者からの
メッセージ

クレアで身に付けた「サバイバル術」 — 3年間の勤務で身に付けた事—



(公財)東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会
国際渉外・スポーツ局国際渉外課長 鈴木 智也

私がクレアに在籍していたのは、平成 21 年度から 23 年度、今から 6 年も前のこととなります。

先日、「勤務中の苦労話や、クレアでの経験を業務にどのように活かしているか、といった内容のエッセーをご執筆ください」という依頼をいただきました。自分の経験談がどの程度お役にたてるのか分かりませんが、在籍中に印象に残ったことを本部勤務時代とニューヨーク事務所時代の出来事から 1 つずつご紹介したいと思います。

クレア本部の企画課に着任したのは、平成 21 年 4 月。当時はクレアに対し、地方自治体や世間一般からの厳しい目が向けられていた時期で、一つ一つの事業を厳しく見直し、自治体にとって使いやすい内容に改善していくことが求められていました。企画課で事業評価を担当していた私は、事業担当のみなさんと夜遅くまで議論をしながら、事業の方向性を探る日々を追われていました。当時は、上司と事業担当との間で板挟みになりながら、大変で面倒だったといった感想しかありませんでした。しかし、今振り返ってみると、こうした議論を通じ、批判する側と事業担当の側とのさまざまな意見や思いを酌みながら、一段掘り下げたものの見方や考え方を身に付けることができたのかな、と思います。

ニューヨーク事務所では、主に自治体からの活動支援や依頼調査を担当していました。いつも「これは…」といった難しい案件ばかりでしたが、2 年目に担当したある自治体からの依頼は、研究所の研究員のために、アメリカの研究機関の視察を複数アレンジせよといった特に難易度の高いものでした。訪



日本からの視察でよく案内した廃線跡地利用の公園「ハイライン」

間希望先のイメージは事前にいただくことができたのですが、研究分野の知識が全くない



私にとって、視 察希望先との調整は大変困難なものでした。それでも、事務所のアメリカ人調査員の助けを借りつつ、なんとか、形にすることができました。こうした中で身に付けたのは、たとえ期待どおりの情報が得られなくとも、提供者（米国側）には感謝して次につなげ、依頼者（日本の自治体）にすぐにフィードバックすることや、依頼者の期待に沿えない可能性があるときには、早めに代替案を示すといったことでした。

平成 24 年の春に帰国した後は、東京都庁の外務部や政策部などに勤務し、現在は、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会での国際渉外の仕事をしています。

どの職場でも、高度な調整や折衝、想定外の事態への対応など、あたふたする場面も多々ありますが、クレアで身に付けた「サバイバル術」を活かして、日々、忙しくも充実した毎日を送っています。

普通の「役所」とはちょっと違ったクレアでの経験は、今の私の仕事のスタイルの大きな基礎の一つとなっているといえるかも知れません。

プロフィール

- 現在の主な仕事内容：
おもに海外関係機関との連絡調整業務
- CLAIR 時代の所属：
2009 年 4 月～2010 年 3 月 本部総務部企画課 主査
2010 年 4 月～2012 年 4 月 ニューヨーク事務所 所長補佐